

## ある亡命ロシア文学史家の肖像 ——D.S.ミルスキー研究の現状と課題——

中 野 幸 男

ドミトリー・ミルスキーは『ロシア文学史』の著者としてよく知られている。<sup>1</sup> この文学史は最近では「時代遅れ」と言われることはあるものの、英語圏では広く一般読者に読まれてきただけでなく、第二次大戦後にもなお多くの大学でロシア文学の入門書として使われてきた。おそらく 20 世紀を通じてもっとも影響力のあったロシア文学史であったと言える。しかし、この文学史の名声とは対照的に、その著者の生涯についてはいまだによく知られているとはいいがたいし、少なくとも日本では彼の生涯や業績について専門的な立場からの研究や評価もまだほとんど存在していないに等しい。しかし、欧米やロシア本国では 1980 年前後からミルスキーを本格的に再評価しようとする機運が高まり、彼に関する基本的な研究が積み重ねられてきた。

具体的には 1978 年に刊行されたロシア語で執筆されたものを集めた論文集 Д. Мирский, Литературно-критические статьи (М.: Советский писатель, 1978) であり、1987 年に刊行された未公開論文を含む論文集 Д. Мирский, Статьи о литературе (М.: Художественная литература, 1987) や 1989 年に刊行された D.S. Mirsky, Uncollected writings on Russian literature (Berkeley. Berkeley Slavic Specialties, 1989) を挙げることができる。また 1990 年代にはジェラルド・S・スミスを中心とする研究者の手によってミルスキーの書簡が Oxford Slavonic Papers などに掲載された。2000 年に刊行された G.S. Smith, D.S. Mirsky: A Russian-English Life (Oxford University Press, 2000) は、現時点での英語圏での D. S. ミルスキー伝の決定版と考えられるが、それ以前から伝記的研究や文献目録がフランスで刊行され、ロシアにおいてもアーカイヴ資料の調査を通じて彼の生涯の細かい事実が次々に明らかにされていた。本稿の目的は、このようなイギリスおよびフランス、ロシアでの先行研究に依拠しながら、日本ではあまり知られていないミルスキーの生涯を簡潔にスケッチし、そこから浮かび上がってくる今後の研究の課題を指摘することである。

まずミルスキーに関する基本的先行研究について述べておく。1980 年にフランスで刊

<sup>1</sup> 姓の読みは「ミルスキー」と表記する。D.S. Mirsky, Modern Russian literature (1925) の邦訳である大西洋三訳『ロシア文学小史』(未来社, 1955) も「ミルスキー」を採用している。ミルスキーの名前については、公爵の称号や父称まで含めた正式な名前は Князь Дмитриц Петрович Святополк-Мирский であり、Святополк-Мирский という二重姓である。イギリス移住を境として D.S. Mirsky の署名になり、ソ連帰還後も Д.С. Мирский と署名した。

行された Lavroukine N. et Leonid Tchertkov. D.S.Mirsky: Profil et bibliographique (Paris. Institut d'études slaves. 1980) はミルスキーの初めての詳細な伝記と文献目録であり、亡命前後にわたり彼の生涯を網羅している。1932 年以後の文献目録については後にスミスにより注がつけられ、補足された。<sup>2</sup> 文献目録はパリ IV 大学講師ニーナ・ラヴルーキン (ラヴルーヒナ) がイギリス時代 (1920–1932) を担当し、出国以前 (1906–1911) および帰国後 (1932–1939) をチェルトコフが担当したが、スミスによればとりわけチェルトコフが担当した 1932 年の帰国以後の部分の発行日などに不備が見られるという。<sup>3</sup> 著者の一人であるレオニード・チェルトコフ (1933–2000) は 1957 年反ソ宣伝により逮捕後 5 年間服役し、1962 年の出所後は簡略文学辞典 (КЛЭ) のミルスキーを含む項目執筆などを行うが 1974 年亡命し、トゥールーズ大学でロシア語を教え、ケルン大学スラヴ研究所に勤務した。<sup>4</sup> またミルスキーの伝記の中心である生年月日と死亡場所・死亡日時に関して、90 年代にはロシア国立アーカイブの資料を使った解明が始まり、特にペールヒンの研究では資料によりそれまで誤記されていた誕生日の修正、死亡年月日・場所の特定が行われた。<sup>5</sup> 2000 年のスミスの研究は初めてのミルスキーの詳細な研究書であり、上記の先行研究が詳細な文献目録と伝記的事実の確認に向けられたならば、スミスの本は自身が述べているように「ミルスキーの文筆活動」に重心を置いた研究である。<sup>6</sup> ミルスキーの誕生から死までを克明に追いながら、その貴族的な家系の歴史、その血筋に対するソヴィエト内でのミルスキーのジレンマ、彼の生活感のないストイックなまでの文学研究と孤独な人物像を元恋人ヴェラ・トレイル (スフチンスカヤ) を始めとする旧知の人物へのインタビューを交えて細部を入念に書き上げながら、ミルスキーをある社会に典型的なタイプとして分類せずに個人の生涯として再構成した。

まずミルスキー自身により書かれた自伝及び上記のスミス、ペールヒン、チェルトコフの先行研究を元に彼の生涯の概略を書いてみる。<sup>7</sup>

<sup>2</sup> Gerald S. Smith, “An Annotated Bibliography of D.S.Mirsky’s Writings,” in G.S.Smith, ed. *D.S.Mirsky. Uncollected writings on Russian literature* (Berkeley: Berkeley Slavic Specialties, 1989), pp.368–386.

<sup>3</sup> Smith, “An Annotated Bibliography of D.S.Mirsky’s Writings,” p.368.

<sup>4</sup> См.: Сергей Чупринин. Новая Россия: мир литературы. Т.2. М., 2003. С.620.

<sup>5</sup> Перхин В.В. Одиннадцать писем (1920–1937) и автобиография (1936) Д.П.Святополк-Мирского. К научной биографии критика // Русская литература. 1 (1996); Перхин В.В. К истории ареста и реабилитации Д.П.Святополка-Мирского (по архивным материалам) // Русская литература. 1(1997). 上記論文および資料は 1989 年より公刊され始めたミルスキーの外国語で書かれた翻訳と合わせて以下の本として 2002 年に出版された。Перхин В.В.(сост.) Д.П.Святополк-Мирский. Поэты и Россия: статьи, рецензии, портреты, некрологи. СПб., 2002.

<sup>6</sup> Gerald.S.Smith, *D.S.Mirsky: A Russian-English Life, 1890–1939* (Oxford University Press, 2000), p.xvi.

<sup>7</sup> Перхин В.В. Одиннадцать писем и автобиография С.Мирского // Перхин В.В.(сост.) Д.П.Святополк-Мирский. Поэты и Россия: статьи, рецензии, портреты, некрологи. СПб., 2002. С.266–274.

ドミトリー・ペトローヴィチ・スヴァトポルク＝ミルスキーは1890年9月9日（旧暦8月28日）、ハリコフ県ギョフカ村に四人兄弟の長男として生まれた。<sup>8</sup> 両親はハリコフおよびオリョール県の地主であり、父親ピョートル・ドミトリエヴィチ・スヴァトポルク＝ミルスキー侯爵（1857–1914）は、ペンザおよびエカテリノスラフ県知事、ヴィルノ総督（1902–1904）の後、内務大臣（1904年8月–1905年1月）を務めたが「血の日曜日事件」の一週間後に職を辞した。<sup>9</sup> 弟アレクセイは後に白軍に従軍し1920年に殺害される。母エカテリーナ・アレクセーエヴナ・スヴァトポルク＝ミルスカヤ（旧姓ボ布林スカヤ伯爵令嬢、1864–1926）と二人の姉は革命後1920年にフランスに亡命し、姉ソフィヤ・ペトローヴナ・パヒトノヴァは白軍兵の技師ニコライ・パヒトノフと結婚しグルノーヴルに住み、妹オリガ・ペトローヴナ・スヴァトポルク＝ミルスカヤはフランスの芸術雑誌編集部で働いた。

ミルスキーはペテルブルクのギムナジウム、テニシェフ校に通い、同窓のナボコフやマンデリシュタムと同様にヴラジーミル・ワシーリエヴィチ・ギッピウス（1876–1941）の薫陶を受け、同級にはヴィクトル・ジルムンスキー、アレクセイ・スホーチン、レフ・プンピャンスキーなどがいた。1906年から1907年にかけて、ジルムンスキー、スホーチン、プンピャンスキーと共に「環」（Звенья）という名の文学サークルで活動し、「エレウテロス」（現代ギリシア語で「自由な、未婚の」、ビザンチン時代ギリシア語で「紳士」、古代ギリシア語で「自由な、自由人」というペンネームを使いロセッティの翻訳などをした。ミルスキーは1908年にギムナジウムを卒業すると、ペテルブルク大学東洋語学部中国語学科に入学するが、学習や専門に対する不満から退学、1911年に志願兵となり、1912年に士官となる。ペテルブルク大学在学中にはセミョーン・アフナーシェヴィチ・ヴェンゲロフ（1855–1920）のプーシキン講義にも出席した。<sup>10</sup> 1913年には予備兵になり、1914年5月にペテルブルク大学歴史・文学部（古典学科）での卒業試験合格、後にアメリカに亡命するM.I.ロストフツェフ（1870–1952）により大学に残る提案を受けるが、動員により1916年夏までドイツ前線にて従軍、1916年から17年にかけてペトログラードの軍事アカデミーでの講習を受け、その後1918年春の復員までカフカスに残る。1918年の6月に外カフカスからウクライナへ、12月にクリミアに渡る。1919年3月に白軍であるデニキン軍に召集され、1920年2月まで参謀職についた。<sup>11</sup> まず第一クバン歩兵師団（ドンバ

<sup>8</sup> Перхин В.В. К истории ареста и реабилитации Д.П.Святополка-Мирского (по архивным материалам) // Русская литература. 1(1997). С.223. に基づく。КЛЭでは1890年8月27日（旧暦8月15日）になっているが、ペールヒンによれば、ソヴィエトのプーシキンスキー・ドームの際の個人資料などに記載されている日時1890年9月9日（旧暦8月28日）が根拠となっている。

<sup>9</sup> Gerald.S.Smith, *D.S.Mirsky: A Russian-English Life, 1890–1939*, p.29.

<sup>10</sup> Smith, *D.S.Mirsky: A Russian-English Life, 1890–1939*, p.47.

<sup>11</sup> См.: Карпович М. Генерал Деникин // Новый журнал. 17 (1947). С.320–321.

ス・ツァリーツィン)、後に第三歩兵師団(ハリコフ・リゴフ)、そして第9歩兵師団(ネジナーティラスポリ)と共にポーランド国境を越え、亡命生活に入る。その後1920年の4月にポーランド・ボズナンの収容所をワルシャワの親類ミハイル・ニコラエヴィチ・スビャトポルク=ミルスキーを頼って脱走し、その後親類の援助によりオーストリアを経てギリシアのアテネで1920年6月から1921年3月まで過ごす。ギリシアより旧知の友人モリス・ベアリングの援助で1921年の夏にイギリスに渡る。イギリスでは文筆業に従事し、1921年の5月同じく旧知のバーナード・ペアズによりロンドンのスラヴ東欧研究所のロシア文学の講師職(Lectureship)を得る。そこでソ連に帰国する1932年まで働く。その後ゴリキーの手助けにより1932年9月30日にソ連に帰国したミルスキーは、1932年10月より1933年5月まで出版社においてレーニンの英訳に携わり、「文学新聞」を中心とする文筆活動に従事し、1934年よりソ連作家同盟会員となる。1937年に逮捕され、1939年に収容所で死亡する。

以上が先行研究に基づくミルスキー生涯の概要である。またミルスキーの伝記の細部、とりわけ1937年の逮捕後の消息や死亡日に関しては長期間にわたる議論が存在し、その問題に関しては後述する。

ミルスキーの人生を要約してスミスは以下のように表現する。

ミルスキーは三つの体制の中で寄生者であることに成功した。ツァーリの下では侯爵であり、資本主義の下では教授であり、共産主義の下では職業作家であった。<sup>12</sup>

ミルスキーの生涯を彩るのはその貴族性であり、それは彼の周りの人間の目からも、彼の生活態度や交友関係などからあらゆる場所に現われていた。彼の生涯の問題となる貴族的出自は、本国帰還後も自己矛盾の直接の原因であり、またゴリキーにとってはミルスキーの語学力の有用性と共に、貴族から白軍兵を経て共産主義者に至った変化のインパクトが魅力となった。1932年2月20日にゴリキーがソレントからロマン・ロランに宛てた手紙の中にミルスキーに関する一節が見られる。

ある心理的变化の面白い事実がある。例えば、ステンボク-フェルモル伯爵、ウラルの豊かな実業家の後継者でありヴィルヘルム第二近衛隊士官は10人の他の士官と共にドイツ共産党に入り、スビャトポルク=ミルスキー公爵、前内務大臣の息子もまた同じく共産主義者と宣言した。ベルギーに住むヒルコヴァ侯爵の息子、元士官で今は労働者、鉦夫もまた自らのかわり

---

<sup>12</sup> Smith, *D.S.Mirsky: A Russian-English Life, 1890-1939*, p.20.

を亡命とはっきりと絶った。<sup>13</sup>

ゴーリキーとミルスキーの関わりは内務大臣であった父を経由し、ゴーリキーにとっては彼を恩赦により救った内務大臣の息子であった。<sup>14</sup> 彼にとってミルスキーは他の者と同様に改悛した貴族たちの一例であり、「元貴族」が改悛したことが意味を成していた。その事実は、後にファージェーフ批判のために非難を受けたミルスキー弁護の際にも現われている。ミルスキーはソ連においてゴーリキーの圧倒的な庇護のもとに存在し、彼により開かれたソ連での生活は必然的に 1936 年のゴーリキーの死により終わりを迎える。

また、彼のいかなる意識的な思想の変化にもかかわらず、ミルスキーの外面的に現われた姿は革命前の貴族であった。革命前交流のあったクズミンも日記の中で彼を「小君主」(Il principino) と呼んでいた。<sup>15</sup> 彼の交友した友人たち、モーリス・ベアリングからエドモンド・ウィルソンは共に貴族的雰囲気をつかち合っていた。ミルスキーは生涯を通じて家事をせず、レストランで食事を済まし、身なりを気にせず、その語学的な才能とは対照的に生活能力に欠けていた。ツヴェターエヴァはロンドンでぼろぼろの服を着たミルスキーと会った際に新しいシャツを買うように説得し、ペアズの秘書でありミルスキーの帰国後も長く交流が続いたドロシー・ガルトンは彼の注文でソ連までズボンを送った。<sup>16</sup> また、ミルスキーの英語能力についてスミスは彼がフィクションを書いていない以上ナボコフとの直接比較は無理だとするが、例えば、他の幼少時代に家庭教師による英語教育を受けなかった作家、コルネイ・チュコフスキー、ニコライ・グミリョフ、あるいはエヴゲニー・ザミャチンとの比較においては、ただミルスキーのみが優れた書き言葉の能力を兼ね備えていたと評している。<sup>17</sup>

ミルスキーは学生時代に詩作を試み、また革命前に詩集をペテルブルクで 1911 年に一冊出版している。『詩集、1906–1910』(1911) と題されたその本はグミリョフの批評に取り上げられ、ミルスキーはその後詩作を止めている。<sup>18</sup> イギリスでは、『ロンドン・マーキュリー』、『コンテンポラリー・レビュー』、『ネーション』等の雑誌に執筆する。1923 年から 1925 年までに白系ロシアの雑誌『現代雑記』(Современные записки)『環』(Звено)に文学論を執筆する。1924 年にパリでロシア詩アンソロジーを出版し、1926 年から 1928 年にかけて『里程標』(Вёрсты)を出版した。英語では、1927 年から 1928 年に二巻本の

<sup>13</sup> Михайлов А.Д., Барахов В.С., Спиридонова Л.Н.(ред.) Архив А.М.Горького. Т.4.: М.Горький и Р.Ролан. Переписка (1916–1936). М., 1995. С.211.

<sup>14</sup> Smith, D.S. *Mirsky: A Russian-English Life, 1890–1939*, p.28.

<sup>15</sup> Smith, D.S. *Mirsky: A Russian-English Life, 1890–1939*, p.41.

<sup>16</sup> Smith, D.S. *Mirsky: A Russian-English Life, 1890–1939*, pp.20–21.

<sup>17</sup> Smith, D.S. *Mirsky: A Russian-English Life, 1890–1939*, p.34.

<sup>18</sup> Smith, D.S. *Mirsky: A Russian-English Life, 1890–1939*, pp.54–57.

『ロシア文学史』および『プーシキン』、1931年に『ロシア：社会史』を出版、『ケンブリッジ中世史』に1015年から1462年にかけてのロシア史に関して一章を執筆した。帰国後の著作としては『インテリゲンツィア』（Интеллигентсия, 1934）があり、この本の中でイギリス時代のブルームズベリー・グループを中心とする知識人の退廃を描き、イギリスで反響を呼んだ。また主に『文学新聞』『イズベスチヤ』などに執筆を行い、グラナート百科辞典の「英文学」の項目を執筆した。その他、A. D. ミレルと共著で『ロシア語・英語辞典』（1936）を編纂し、後のプロツキーがその中でオーデンを付け出す『新イギリス詩アンソロジー』（1937）を編集するが、1937年の逮捕後は二版以後辞典の著者名からミルスキーの名前は消え、アンソロジーの編者は翻訳者の一人であったグトネルに変わった。<sup>19</sup>

ミルスキーの生涯における移動とその動機は常に論点となる。1914年の革命によるロシアからイギリスへの亡命、1932年のイギリスからロシアへの帰国は、その動機と共にミルスキーの人生の転換点となっている。イギリスに行く過程では、アテネにてミルスキーは、『ロンドン・マーキュリー』にベアリングの名前を見つけ、状況を変えるべく1920年9月5日ベアリングに手紙を送っている。

おそらく君は僕の考えがいつも文学の仕事をするものであったことを知っているだろう。でもロシアでは文学の仕事は全く不可能で、この物事の状態がいつ変わるかだれも分からない。そこで僕はイギリスかフランスで文学の仕事ができればいいかと考えるようになった。<sup>20</sup>

早速ベアリングの働きでミルスキーのアテネからの原稿は1920年の12月に掲載され、ベアリングはミルスキーのイギリス渡航費用10ポンドを捻出するために「ヘンリー・ジェイムズのコレクションを半分売る」ことになる。<sup>21</sup> この16歳年上の友人の助けによりミルスキーは1921年の夏にイギリスに到着する。ミルスキーのスラヴ東欧研究所への着任は1922年の5月であり、1932年までここで教える。<sup>22</sup> またロンドンにてミルスキーは『ロンドン・マーキュリー』や『クライティリーオン』を初め、様々な雑誌に寄稿し、講師職の薄給を埋め合わせるために、週に一回公開講義を行い、様々な媒体で執筆を行った。<sup>23</sup> ま

<sup>19</sup> Smith, “An Annotated Bibliography of D.S.Mirsky’s Writings,” pp.368–385; Smith, *D.S.Mirsky: A Russian-English Life, 1890–1939*, p.253.

<sup>20</sup> Nina Lavroukine, “Maurice Baring and D.S.Mirsky: A Literary Relationship,” *Slavonic and East European Review*. 62:1(January 1984). p.27.; Smith, *D.S.Mirsky: A Russian-English Life, 1890–1939*, p.74. またこの手紙は「スビャトポルク＝ミルスキー」の二重姓が名乗られる最後の手紙となる。

<sup>21</sup> Lavroukine, op.cit., p.29.

<sup>22</sup> Мирский Д. Одиннадцать писем и автобиография // Перхин В.В.(сост.) Д.П.Святополк-Мирский. Поэты и Россия: статьи, рецензии, портреты, некрологи. СПб., 2002. С.267.

<sup>23</sup> Bernard Pares, *A Wandering Student: The Story of a Purpose* (Syracuse, 1948), p.290.

た 1925 年から 1926 年にかけて起こったというミルスキーの内部での「変化」は、彼自身によると以下のような契機で起こった。

1925 年から 1926 年にかけて自分に転機が訪れた。最初はソヴィエト文学の影響であった。1926 年にこの転機で決定的な役割を果たしたのはイギリスでのゼネラルストライキであった。<sup>24</sup>

また 1926 年には、彼の『ロシア文学史』が捧げられている友人の古典学者・人類学者ジェーン・エレン・ハリソンの援助により雑誌『里程標』Вёрсты の編集・発行を行い、1928 年にはユーラシア主義者たちの機関紙『ユーラシア』Евразия に寄稿し、自身の親ソ傾向を強めていく。<sup>25</sup> 1929 年末にイギリスの出版社からの委託によりレーニンの伝記の執筆を行い、その出版が契機となって 1931 年にイギリス共産党に入党する。<sup>26</sup> ペアズの秘書であったドロシー・ガルトンの父は、ファビアン協会でウェッブ夫妻の書記を勤め、レーニンが『労働組合主義の歴史』を翻訳するのを手伝った。この話はミルスキーを喜ばせ、社会主義者であることを隠さなかったガルトンはミルスキー自身にもファビアン協会でウェッブ夫妻の前で講演する機会を与えた。そして彼女によれば、社会主義者である自分自身がミルスキーの変化に影響を与えた、と語っている。<sup>27</sup> またミルスキーは 1928 年に合衆国で講義を行っており、それはロシア人亡命者であるコロンビア大学経済学教授ミハイル・フロリンスキーの援助によるものであった。1926 年 5 月 8 日のフロリンスキーからの手紙ではこう書かれている。

ニューヨークに移住する気はないだろうか。おそらくコロンビア大学は君を喜んで迎えるだろう。しかしそれに君がどのくらい満足するかは分からない。それでも思うのは、ヨーロッパはやはり私や君のような老人には少なくとも快適だということだ。君に連続講義や周遊旅行を準備することもできるだろう。もし関心があるようなら、手紙をくれ。<sup>28</sup>

ミルスキーはコロンビア大学のクラレンス・A・マニングより 1928 年 6 月 1 日より 15 日までの招待状を受け、600 ドルの予算で授業を行うことになる。「良心と義務感」から

<sup>24</sup> Мирский Д. Одиннадцать писем и автобиография. С.267.

<sup>25</sup> G.S. Smith, "Jane Ellen Harrison: Forty-seven Letters to D.S.Mirsky, 1924–1926," *Oxford Slavonic Papers*, 28 (1995). p.86.

<sup>26</sup> Мирский Д. Одиннадцать писем и автобиография. С.267–268.

<sup>27</sup> Dorothy Galton, "Sir Bernard Pares and Slavonic Studies in London University, 1919–1939," *Slavonic and East European Review*. 46 (July 1968).p.487.

<sup>28</sup> G.S.Smith, "The Correspondence of D.S.Mirsky and Mikhail Florinsky, 1925–32," *Slavonic and East European Review*. 72:1(January 1994) p.127.

合衆国へ渡り、コロンビア、コーネル、シカゴの各大学で講義を行った。<sup>29</sup> その後、心境と状況の変化からミルスキーはフロリンスキーに合衆国移住の可能性を尋ねる。

1930年1月17日「突然だが（それほど突然でもないが）アメリカに移住しなければならないという結論に達した。[中略] ペアズとの同居はついに、完全ではなくとも、耐え難くなっている。他のよい見通しが全くない。私が共産主義を信奉しているにもかかわらず、やはりソ連へ行くことはできない。何といおうと社会的に異質だ。残っているのはアメリカだ。」<sup>30</sup>

1930年3月13日「スタンフォードについて何かできると思わないだろうか。[中略] 私の人生は今（政治についてではなく）はなはだ劇的にできあがっている。どんな変転を人生が受けるのか予想もできない。とにかくアメリカへの移住は極めて望ましい。そうでなければ残るのはソ連への一本道だ。そこへは明日にも手ぶらでいけるが、当面は個人的な理由で差し控える。」<sup>31</sup>

「個人的な理由」とはミルスキーが夫と別れて自分と住むように説得していたヴェーラ・スフチンスカヤ、ユーラシア主義者ピョートル・スフチンスキーの3番目の妻、との絶縁と推測されている。<sup>32</sup> また、ここでミルスキーは、アテネからベアリングへ送った1920年の手紙と同じように、その10年後に再びフロリンスキーにアメリカへの渡航援助を求めている。一方、1922年に導入されたナンセン・パスポート所有者で革命による政治亡命者のままであったミルスキーは、ペアズを通じてイギリス内務省での労働許可の更新を行っていたが、ペアズが政治活動を強めるミルスキーに対して申請を手助けしなくなった時、ミルスキーの前にソ連への道だけが残された。<sup>33</sup> 1931年末にミルスキーはゴリーキーを通じてソ連帰還申請を行い、1932年9月30日にソ連に帰国した。<sup>34</sup>

ソ連においてミルスキーはゴリーキーの庇護のもと、文学評論家・翻訳家として活動を行い、西欧文学の該博な知識を背景に『文学新聞』などに寄稿した。ソ連共産党黨員にはならなかったものの、ソ連作家連盟会員（212番）として盛んに執筆を行った。<sup>35</sup> しかし

<sup>29</sup> G.S.Smith, “The Correspondence of D.S.Mirsky and Mikhail Florinsky, 1925–32” p.129. ; G.S.Smith, “D.S.Mirsky, Literary Critic and Historian,” in G.S.Smith, ed. *D.S.Mirsky. Uncollected writings on Russian literature*, 1989, p.26.

<sup>30</sup> Smith, “The Correspondence,” p.133.

<sup>31</sup> Smith, “The Correspondence,” p.135.

<sup>32</sup> Smith, “The Correspondence,” p.135; G.S.Smith “D.S.Mirsky: Twenty-two Letters (1926–34) to Salomeya Halpern; Seven Letters (1930) to Vera Suvchinskaya (Trail),” *Oxford Slavonic Papers* 30 (1997), pp.114–120.

<sup>33</sup> Smith, “D.S.Mirsky, Literary Critic and Historian,” p.26.

<sup>34</sup> *Мирский Д.* Одиннадцать писем и автобиография. С.268.

<sup>35</sup> Smith, “D.S.Mirsky to Dorothy Galton: Forty Letters from Moscow (1932–1937),” p.96.



1934年6月の『文学新聞』におけるファジェーエフ批判の論文によりミルスキーに対する風当たりは強くなるものの、ゴリキーが介入し1935年1月24日に『プラウダ』にて弁護を行うと事態は収束に向かった。<sup>36</sup> しかし1936年6月18日にゴリキーが亡くなるとその援護もなくなり、1937年6月3日に逮捕される。<sup>37</sup>

ミルスキーの死亡日問題が提起されたのは1940年代後半とされている。スミスによれば、出版社アルフレッド・H・クノップフの依頼によりフランシス・J・ホイットフィールドが二巻本のミルスキーの文学史を一巻本に再編集する話が持ち上がった際に、公式のルートでミルスキーの情報を得ようとしたが、当時のソヴィエト大使館はいかなる情報も提供しなかった。<sup>38</sup> また、1955年にエドモンド・ウィルソンは『エンカウンター』に掲載した「同志侯爵：D.S.ミルスキーの思い出」にて1952年5月1日にヨーロッパのあるロシア人祖国離脱者がミルスキーの知人の一人に当てた手紙の翻訳を発表した。そこにはミルスキーは1939年1月末に亡くなったと書かれている。<sup>39</sup> 1967年に出たソ連国内の文学辞典ではミルスキーは「1937年不当に弾圧され、死後復権された」とのみ書いてある。<sup>40</sup> また、ウィルソンが引用した文章のロシア語版は1977年のユーリー・イヴァスク「スピャトポルク＝ミルスキー侯爵の死について」に再録され、イヴァスクがエリザヴェータ・パーヴロヴナ・シュヴァーロヴァ公爵夫人より受け取った手紙と書かれている。<sup>41</sup> 1979年に出されたミルスキー編『ロシア抒情詩』の序文でグレープ・ストルーヴェが、コルイマに服役していたある有名なソヴィエトの文学者の言葉を紹介している。<sup>42</sup> G. S. スミスはこの文学研究者をYu. G. オクスマンだとし、その根拠として彼が1936年に逮捕され10年間収容所で過ごし、後年イワノフ＝ラズムニクに「ミルスキーは1939年あるいは1940年にナガエヴォにて栄養失調で亡くなった」と語っていたことを挙げている。<sup>43</sup> またチェルトコフによる伝記では「1939年1月」説を踏襲している。<sup>44</sup> 解決を見たのは90年代になってからであるが、ペールヒンによれば、ロシア連邦国立アーカイヴの1939年8月5

<sup>36</sup> Smith, *D.S.Mirsky: A Russian-English Life, 1890–1939*, p.268.

<sup>37</sup> Перхин В.В. Одиннадцать писем и автобиография. С.265.

<sup>38</sup> Smith, *D.S.Mirsky: A Russian-English Life, 1890–1939*, p.295.; Francis J. Whitfield, “Editor’s preface,” *D.S.Mirsky, A History of Russian literature and Contemporary Russian literature* (New York, 1949), p.v.

<sup>39</sup> Edmund Wilson, “Comrade Prince,” *Encounter* 22 (July 1955), pp.18–20.

<sup>40</sup> Чертков Л.Н. Мирский, Дмитрий Петрович // Краткая Литературная Энциклопедия. Т.4. М., 1967. С.862.

<sup>41</sup> Иваск Ю. О смерти кн.Святополк-Мирского // Новый журнал. 127 (июнь 1977). С.290–292.

<sup>42</sup> Струве Г.П. Предисловие // Мирский Д.С. Русская лирика: маленькая антология от Ломоносова до Пастернака. New York, 1979. С.27.

<sup>43</sup> Smith, *D.S.Mirsky: A Russian-English Life, 1890–1939*, p.365.

<sup>44</sup> Lavroukine N. et Leonid Tchertkov. *D.S.Mirsky: Profil et bibliographique* (Paris: Institut d’etudes slaves), 1980. p.50.

日のソ連内務人民委員部第1特別課宛での通知書に基づき、「1939年6月6日死去」であることが判明している。<sup>45</sup> ミルスキー個人文書による確認のもと、スミスもそのミルスキー伝の最後に、彼は1939年6月6日に亡くなりその翌日埋葬されたと書いている。<sup>46</sup>

最後に先行研究の後に残された課題について述べる。今後のミルスキー研究としての課題について、スミスによれば今後の課題は「ミルスキーが書いたものとロシアにおける先行する文学研究」との関わりであるという。<sup>47</sup> ミルスキーに先行する世代の文学研究の代表格として挙げられるのは何よりもまずプーシキン研究の基礎を作り出したヴェングロフであり、彼の文学史におけるヴェングロフ描写は以下のように書かれている。

最も若いのがセミョーン・アフナーシエヴィチ・ヴェングロフであり、彼のロシアの文献目録や文学的伝記への貢献は計り知れない。彼はまた、ペテルブルク大学の文学教授として若い学生を文学研究に推し進めた点で見事な仕事をした。しかし彼の歴史、評論や編集における業績（彼は1908年から1915年にかけてプーシキンの記念碑的な版を編集した）は彼の見解をうまく表してはいない。<sup>48</sup>

ミルスキーにとってヴェングロフは伝記的事実と資料に重点を置き、客観性に基づく学者であり、詩人を理解するための感性を備えた評論家ではなかった。またエドモンド・ウィルソンはミルスキーを評しながら「彼は決して好事家ではなかった。彼の読み方は体系的であった。一方、彼は細かく一つの分野だけを専門とするアカデミックな学者でもなかった。」<sup>49</sup> と述べている。スミスはヴェングロフやジルムンスキーと比較した上でミルスキーを「彼は決して教授ではなかったし、専門化された学者でもなく、さらに学究ではなかった。彼はいかなるテキスト研究、文学目録、文学研究的な仕事も出版していない。彼は常に主要な関心を現在の文学的出来事に据えた実地的な評論家だった」<sup>50</sup> と述べている。ミルスキーの作品の際立った特色はその「主観性」であり、その姿勢は学究とは程遠い。1924年に出版したロシア詩集をミルスキー自身「主観的なもの」としている。

私は（無駄話を恐れつつ）ここで私のアンソロジーの客観性や、それを客観的なものにしようとする努力を主張しようとはしない。それは正しくはないだろうし賢くもない。精密科学の

<sup>45</sup> Перхин В.В. К истории ареста и реабилитации Д.П.Святополка-Мирского (по архивным материалам). С.235. なおペールヒンによれば、誕生日が誤っていたものの、最初に正確な死亡日が発表されたのは以下の資料による。Ашнин Ф.Д., Алнатов В.М. «Дело славистов»: 30-е годы. М., 1994. С.264.

<sup>46</sup> Smith, D.S.Mirsky: *A Russian-English Life, 1890-1939*, p.318.

<sup>47</sup> Smith, D.S.Mirsky: *A Russian-English Life, 1890-1939*, p.xvii.

<sup>48</sup> D.S.Mirsky, *Contemporary Russian Literature, 1881-1925*, (New York, 1972), p.323.

<sup>49</sup> Wilson, "Comrade Prince," p.15.

<sup>50</sup> Smith, D.S.Mirsky: *A Russian-English Life, 1890-1939*, p.318.

方法論にかつて携わったものは、自然科学の一般化においてさえ主観性の要素がいかに大きく不可欠であるかを知っている。あらゆる主張は一般化であり、あらゆる一般化は歪曲である。<sup>51</sup>

「主観性」の不可避性の主張は 1924 年のアンソロジーの編纂だけでなく、同様に 1927 年のミルスキーの文学史にも現われている。

私の理解や批評は「主観的であり」個人的であるかもしれないが、そうであったとしても、それらは文学的または「美学的」偏見の産物であり、政治的な党派感情のものではない。<sup>52</sup>

こうした「主観性」の自認に由来する非学者的な態度はミルスキーのみならずエドモンド・ウィルソン本人やモーリス・ベアリングなどの執筆活動にも響きあっている。また、党派性に由来しない文学的な立場である「主観性」を信頼するミルスキーがその文学史の中でゴーリキーを「最終的に客観的な作家になった」<sup>53</sup> と語るときに、そこには以前のゴーリキーに見られた文学性が失われたことを示しているとも読むことができる。ゴーリキーの賞賛したヴェンゲロフの立場はイデオロギーに立脚した文学研究であり、ミルスキーのような文学作品に対する美学的態度ではなかった。<sup>54</sup> 後にファージェーフ作品批判の際に現われたように、ミルスキーの美学的判断がその体制側の判断と一致しなかった際には、その立場は肅清理由となった。

国外では、ホィットフィールド編の一巻本により復刊されたミルスキーの文学史は、彼の死後も英語圏で影響力を持ち、1972 年にはプレトニョフにより、既に「いくらか廃れた」<sup>55</sup> と書かれたものの、現在でも英語圏ではその文学史の内容が価値を保っている。これまでに彼の文学史がロシア文学への入り口としてその内容を理解する直接的な役割を果たしたならば、ミルスキーの伝記的事実に依拠しながら、そのミルスキーが文学史を語る際の「主観性」の持つ危険性や先進性を、ヴェンゲロフを含むソ連内部での文学研究に照らし合わせながら読み解く作業は今後の課題になると言える。

<sup>51</sup> Кн.Святополк-Мирский Д.(сост.) Русская лирика: маленькая антология от Ломоносова до Пастернака. New York, 1979. С.v.

<sup>52</sup> Mirsky, *Contemporary Russian Literature, 1881–1925*, p.ix.

<sup>53</sup> Mirsky, *Contemporary Russian Literature, 1881–1925*, p.118.

<sup>54</sup> См.:Бавичева М.Е. и др.(Авт-сост). Венгеров Семён Афанасьевич (1855–1920) // Русские филологи XIX века: Биобиблиографический словарь-справочник. М.,2006. С.112–122.

<sup>55</sup> Плетнев Р. Русское литературоведение в эмиграции // Полторацкий Н.П.(ред.) Русская литература в эмиграции: сборник статей. Pittsburgh, 1972. С.264.

## **Портрет одного русского эмигрантского историка литературы:**

Сегодняшняя ситуация и задачи в исследовании  
о Д. П. Святополк-Мирском

НАКАНО Юкио

Цель данной статьи заключается в том, чтобы показать краткую биографию эмигрантского и советского литературного критика Д. П. Святополк-Мирского (Мирского), резюмировать главные предыдущие исследования о нем на русском и других языках, а также проанализировать проблемы, оставшиеся до сих пор вне поля зрения исследователей.

Одна из проблем для написания биографии критика такова: когда и где умер Мирский? В советское время, как показывает статья в КЛЭ, в 1937 г. Мирский был «незаконно репрессирован, посмертно реабилитирован». Но там не указаны дата и место смерти критика. В 1980 году во Франции была издана его биобиблиография, написанная Н. Лаврухиной, преподавателем Парижского четвертого университета, и Л. Чертковым, автором статьи о Мирском в КЛЭ, эмигрировавшим во Францию в 1974 году. Основываясь на информации, содержащейся в статье американского критика Эдмунда Вилсона, Чертков повторил, что Мирский умер «в январе 1939 года в Магадане». В 90-годы появился ряд исследований В. В. Перхина по материалам ГАРФа. По архивным материалам Перхин доказал, что дата смерти Мирского — «6 июня 1939 года в Бутырской тюрьме». Английский литературовед Д. С. Смит, автор книги «Д. С. Мирский: Русско-английская жизнь, 1890–1939» (2000), опираясь на предыдущие исследования и англоязычные материалы, углубил тему соотношения эмиграции и литературы.

Учитывая достижения предыдущих работ, автор настоящей статьи видит задачу своего дальнейшего исследования в выяснении соотношения между литературно-историческим аспектом трудов Мирского и их ролью как свидетельств о жизни его современников. По мнению Смита, Мирский должен рассматриваться в истории русского литературоведения. В этой связи стоит сравнить подход Мирского с подходом его ментора в Санкт-Петербургском университете, историка литературы С. А. Венгерова. Как признавал сам Мирский, его история русской литературы субъективна. Согласно Мирскому,

主観性（ субъективность ）は、その文学的・美的見解の産物として現れる。本文の著者は、この点から、ミルスキーの「ロシア文学史」の価値は、その主観性の中にあり、その主観性が、その時代・環境・著者の個性を反映していることを示している。ミルスキーの「ロシア文学史」は、その時代・環境・著者の個性を反映しているだけでなく、その時代・環境・著者の個性を反映しているだけでなく、その時代・環境・著者の個性を反映している。